様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：２４５０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６４６３３８８

研究課題名（和文）外国籍女性のライフコース研究　リプロダクティブヘルスの向上に向けて

研究課題名（英文）Life Course Study of Foreign Women Toward Improving Reproductive Health

研究代表者
嶋澤　恭子（SHIMAZAWA, KYOKO）

神戸市看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：９０３８１９２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、本邦に暮らす高齢化のすすむ外国人女性のリプロダクティブヘルスに焦点を当て、日本に暮らす外国人女性が各々のライフコースおいて実践してきた医療保健行動を明らかにする。特に、「ニューカマー」と分類され、就労者として、日本人の妻として移住して20年以上が経過する、40代以降のアジア（主にネパール、ベトナム）出身の女性たちについて焦点を当てた。
　その結果、リプロダクティブヘルスについては脆弱であった。それぞれの女性たちの在留背景の差異、および持っている資源の差異により、多様な医療保健行動の実態が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：　This research focuses on the reproductive health of aging foreign women living in Japan and clarifies the medical health behaviors practiced by foreign women living in Japan for each life course.In particular, we focused on women from Asia (mainly Nepal, Vietnam) since their 40s, who were classified as "Newcomers" and worked as migrants as Japanese wives for more than 20 years.
　As a result, reproductive health was vulnerable. Differences in the residence background of each woman and differences in the resources it has made reveal the diversity of health care behaviors.

研究分野：助産学

キーワード：リプロダクティブヘルス　外国人女性

１．研究開始当初の背景

日本における在留外国人数は、1980 年代から概ね増加傾向にあり、男女比で見ると女性がやや多く、年齢構成では生殖可能年齢が多い。

日本社会の急速な高齢化と同様に、在留外国人の高齢化も進んでおり、特に女性の高齢化は著しい。特に 1980 年代以降に日本へ移住した「ニューカマー」と呼ばれる日系人や日本人と結婚して暮らす人々は、日本に定住してからすでに 20 年以上が経っており、高齢化が進んでいる。加齢に伴い本国の頼るべき肉親との関係も希薄となり、日本での失職や配偶者との離婚・死別など、益々、経済的社会的基盤は脆弱になりつつある。

高齢化に伴い問題化しているのが、中高年齢層のリプロダクティブヘルスである。女性の多くが子宮や乳房関連の疾病、癌、更年期障害等に悩まされる。厚生労働省による国民生活基礎調査によれば、何らかの健康上の問題症状を抱える者は女性の方が多くなっているものの、中高齢期の健康診断の受診率はジェンダーによって大きな開きがあることが指摘されている（佐々木・波崎他 2006）。更年期の女性の身体の不具合については、医療化すべき問題として捉えられてはこなかった文化的背景から、中高年齢の女性の身体に医療的な介入が行われることを躊躇する文化的土壌がある（ロック 2005）。

外国人女性のリプロダクティブヘルス分野の先行研究においては、「外国人女性」と一括りにし、その視点は生殖年齢にある若年層に注がれており、中高齢層の外国人女性のリプロダクティブヘルスに関する研究はほとんど未着手のままの状況にある。もともと女性の健康診断の受療率が低い上に、外国人女性の場合、更に健康診断を受ける機会も十分な治療を行う機会にも乏しいのが現状である。

特に、女性たちは、経済基盤の脆弱性、且つ、社会福祉や医療保健制度などの情報を十分に得られないまま、年齢を重ねてきている。

２．研究の目的

本研究は、本邦に暮らす高齢化のすすむ外国人女性のリプロダクティブヘルスに焦点を当て、在日外国人女性が各々のライフコースにおいて、どのような医療保健行動を行ってきたのか、その医療保健行動の実践を明らかにすると共に、益々高齢化する女性達にとって、安心して高齢期を過ごすことを可能にするためには誰が何をするべきか、どのような保健医療制度が必要かを明らかにするものである。特に、「ニューカマー」と分類され、就労者として、日本人の妻として移住して 20 年以上が経過する、高齢化の著しい、アジア（主にネパール、ベトナム）出身の女性たちに焦点をあてて、国際保健の構造的な隙間にある国境を超えて移住する女性たちのリプロダクティブヘルスサービスの向上に向けて実践的な研究を行うことが本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）日本国内において、在日外国人女性向け特に中高年齢の保健サービスの現状、及び国や地方自治体の施策について、文献資料、聞き取り調査より把握する。

（２）80 年代～90 年代に来日した中高年齢（40 歳代以上）の外国人女性（主にネパール、ベトナム出身）を対象に、ライフコースと保健医療行動に焦点を当てて、来日前、来日後に分け、病歴やライフステージごとに直面した身体上の問題、健康診断の受診状況、医療保健サービスの受療行動、自身で実施した民間療法、家族や地域社会との関係、母国との関係について、複数回にわたる半構造的インタビューを行った。また、日本語運用が困難な対象には通訳者を介して行った。本研究においては所属する大学の研究倫理審査にて

承認を受けている。

４．研究成果

（１）日本での在日外国人向けの政度・サービスは、外国人集住地区を持つ自治体をはじめ、多くの自治体が NPO や支援団体と協働する形、あるいはそれぞれに情報やサービスの提供を行っていた。しかし、それはいわゆる生殖年齢の女性増加が顕著であることを背景に、リプロダクティブヘルスの中でも、特に妊娠、出産、育児に焦点を当てていることが文献や自治体資料から明らかとなった。中高年の外国人女性向けの情報やサービスについては、介護保険サービスに関するものがわずかに見られた程度であった。言葉や社会文化背景の違いから、介護保険サービスがうまく利用できない、または溶け込めないという課題も聞かれた。

（２）80 年代～90 年代に来日した中高年齢（40 歳代以上）の外国人女性（主にネパール、ベトナム出身）を対象に、15 名の聞き取り調査を複数回にわたり行った。調査データの分析作業は現在進行中であり、データ入力、テープおこし、コーディング、分析については丁寧に作業する必要があり時間を要している。現在も作業中であるが、現在までの分析過程で浮かび上がってきた事柄を列挙する。

①妊娠・出産・育児までは医療や地域とのつながりがあったが、子供が成人となり家庭を持ち、独り暮らしの高齢者が少なくなく、医療や福祉への情報アクセスが脆弱であるだけでなく、自分の終末期をどう迎えるかという課題に直面している。

②閉経前後の体調不良や不眠、更年期障害などについては医療機関への受診はほとんどされず、民間薬や健康食品などで対処している事例が見られる一方、生活保護受給者の場合は、複数の病院や医院への通院を経験し複数の薬剤を内服している。

これらから、日本の在留背景や、持っている資源によって保健医療行動が特定されてることがわかる。

③「労働者」として雇用されていた時期は健康診断を受けていたが、不安定な就労生活の後、そして中高年になってからの健康診断をはじめとする保健医療サービスについてはアクセスも情報も脆弱である。

④同郷コミュニティの中で懇意にしていた友人や家族の成員が帰国する一方で、生活困窮者を中心として日本に滞在することを余儀なくされている人たちがいる。

⑤同郷のネットワーク、成人した子どもたち、そして生活保護が生活のセーフティネットになっていることが想定される。

⑥日本に「難民」「労働者」「家族に同伴、あるいは家族呼び寄せ」で入国してから、「定住者」となり、20 年以上経過した現在には、ホームヘルパーや介護福祉士の資格取得を目指すもの、ボランティアで高齢者の在宅見守りや訪問相談を行い、同郷者への支援活動をしているものの存在があった。

以上のように、中高年の外国人女性へのリプロダクティブヘルスに関する実態および実践的課題の一端が浮かびあがったが、同時に「在日外国人」と一括りにできないことが顕在化した。特に永住者、ニューカマー、就労や家族呼び寄せ等、在留背景に違いによって、医療保健行動の実践には大きな差異があることがわかる。

現在進行中の分析をすすめて調査結果をまとめ学会誌への投稿を準備する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

１．嶋澤恭子、宮下ルリ子、平田恭子、奥山

葉子、有本梨花、村松紀子「助産師教育における外国人妊産婦への助産実践の導入：コミュニケーション演習の実際と評価」『神戸市看護大学紀要』21（87-93）,2017.

２．嶋澤恭子、内正子、高山良子、竹橋美由紀、新田和子、山本和代、二宮啓子「JICA ダナン研修プロジェクトにおけるベトナム看護職への教育支援の経験：Cultural Competency に着目して」『神戸市看護大学紀要』 21（85-91）, 2017.

〔学会発表〕（計　11 件）

Ⅰ．幅崎麻紀子「ネパール（バフン社会）における子育て環境の変容：子どもとコミュニケーションを中心に」日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 18 日、幕張メッセ.

２．幅崎麻紀子「ネパール（バフン社会）における子育て環境の変容：女性の就労と母乳育児政策を中心に」平成 26 年度 HINDAS（広島大学現代インド研究センター）第 3 回研究集会、2014 年 10 月 4 日、広島大学.

３．幅崎麻紀子「家族計画をめぐる政策と実践--ネパールにおける生殖の「自己決定」、第 47 回南アジア研究集会（招待講演）、2014 年 7 月 27 日、愛知県 女性総合センター.

４．幅崎麻紀子「生活環境の変化と月経文化の調整：ネパールの場合」、アジアのジェンダーとリプロダクション WS、2015 年 2 月 7 日、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター.

５．幅崎麻紀子「家族計画を考える：ネパールの場合」アジアのジェンダーとリプロダクション WS、2015 年 2 月 7 日、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター.

６．嶋澤恭子「女性の健康と経験を繋ぐ―ラオス南部における産後養生」日本文化人類学第 49 回研究大会、2015 年 5 月 31 日、大阪国際センター.

７．Kyoko SHIMAZAWA, Aspects of Medicalization of Childbirth in Laos: “Kho Pat” ,ICM Asia Pacific Regional Conference 2015,2015 年 7 月 21 日、パシフィコ横浜.

８．幅崎麻紀子「女性研究者の活躍と躍進」、平成 27 年農林水産関係研究リーダー研修、2015 年 5 月 27 日、中央合同庁舎

９．幅崎麻紀子「ワーク・ライフ・バランス～WLB マネジメントに向けて～」、2015 年 12 月 4 日、平成 27 年度農林水産関係中堅研究者研修、つくば産学連携支援センター.

10．幅崎麻紀子「『女性の活躍』を推進するためには～WLB 施策の充実と女性上位職の育成にむけて」、いばらきコープ女性幹部育成のための学習会、2016 年 2 月 12 日、いばらきコープ.

11．幅崎麻紀子「自分らしいライフプラン実現のために~転ばぬ先の人生設計」青森県「20 代を変える『生き方ナビ』事業」就職合宿（招待講演）2017 年 2 月 24 日、八戸シーガルビューホテル.

〔図書〕（計　４件）

１．幅崎麻紀子「人生を成功させるためのライフプランニング」、メグ・ジェイ著『人生は 20 代で決まる』早川書房、2014 年、274-280 頁.

２．幅崎麻紀子「『寡婦』が結ぶ女性の繋がり――ネパールにおける寡婦の人権運動」、南真木人、石井博編『現代ネパールの政治と社会:民主化とマオイストの影響の拡大』明石書店、2015 年、411-458 頁.

３．幅崎麻紀子「いのちと世界観」、道信良子編、『いのちはどう生まれ、育つのか――医療、福祉、文化と子ども』岩波ジュニア新書、2015 年、55－61 頁.

４．嶋澤恭子「ChapterⅡ-2　ジェンダー」田代順子監修『ワークブック国際保健・看護基礎論』ビラールプレス、2016 年、55-81 頁.

６．研究組織

(1)研究代表者

嶋澤　恭子（SHIMAZAWA Kyoko）

神戸市看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：90381920

(2)研究分担者
幅崎　麻紀子（HABASAKI Makiko）
大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員
研究者番号： 00401430